

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	阪井, 裕一郎(Sakai, Yūichirō)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.81- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 著者リプライ

阪井 裕一郎

本書を取り上げて頂いた三田社会学会編集委員会と、書評をお引き受けくださった小関孝子先生に心より感謝申し上げます。小関先生には、本書の内容を的確に要約していただいたうえで本研究の課題と今後の可能性について貴重なご意見を提示していただいた。以下、頂いたご指摘に沿いながら、本研究の背景にある問題意識やご批判への応答を記していく。

まず小関先生から、「全体をふりかえると、読み応えがあるのは論文がもとになっている明治期から戦時中までの分析である」とご指摘いただいたように、以前に刊行された学術論文を軸とした前半部に比して、戦後の記述は学術的なトーンがやや弱いかもしれない。本書のもとになった修士論文では戦後の記述はエピソード的に記すのみであったゆえ、第4章以降は新たに書き下ろした部分になる。一貫性を重んじて言説分析に徹するのであれば、戦後の書籍についても詳細な資料分析をする必要があった。実際、当初は戦前と同様に、戦後に刊行された結婚関連書籍の言説を分析するという手法を考えていた。しかし、実際に資料を読み進める中で「ハウツー」の記述に終始する書籍の内容から、社会学的な知見を導き出すアイデアが生まれてこなかったというのが正直なところである。その一方、仲人を研究することの意義を考えたとき、戦後の社会構造の変動と結びつけるかたちで、見合い結婚や仲人の役割を分析するという視点が浮かび上がってきた。全体を通じて分析の対象や手法にばらつきが出てしまっているものの、仲人の変容を人々の「帰属先」の変容と関連づけるというオリジナルな知見を導き出すことができた点は本書の重要な成果だと考えている。

次に、小関先生から頂いた、「言説研究を重視するあまりに『仲人』の実相がつかめないまま、つまり、具体的に仲人が何をしていたのかをイメージできないままに終わってしまった。……仲人の実態が描かれていないという限界が違和感として残ってしまった」というご批判も正鵠を得たものであり、筆者も強く自覚していた点であるがゆえ痛いところを突かれたという思いである。本研究で扱う対象は仲人をめぐる「言説」であるため、「実態」を示した記述は少ない。実際の仲人の様相や活動についてもっと知りたかったと考える読者には少々不満を感じるころであろう。その意味で、『仲人の近代』と題された本書は、「仲人」そのものの実態を明らかにするものというよりは、「仲人を立てること」の意味・言説の歴史的変遷についての分析だといえる。この点は資料収集における私の力量不足も一つの要因であるが、「仲人を通して何を明らかにしたいのか」という筆者の問題関心に起因する部分もある。すなわち、「仲人が何をしていたか」の実態への関心よりも、仲人や結婚媒介が社会のなかでどのように意味づけられ規範化されていたのかの分析を通じて、近代化プロセスにおける家族規範の変容を描き出すという

問題意識である。とはいえ、それは言い訳に過ぎない。当然のことではあるが、本書で仲人研究を終わらせるわけにはいかないだろう。不足している「実態」の研究については、歴史資料のみならず新たに仲人経験者へのインタビュー調査をおこなうことも含めて、引き続き取り組んでいきたい課題である。

やや書評の内容からはそれてしまうが、本書の執筆に時間がかかったことや全体のストーリーの「揺らぎ」の理由に、修士論文執筆時から現在までの自分自身の問題意識の少なからぬ変化が影響しているように思う。自己分析的に述べるならば、主に 2 章と 3 章で展開する議論は、国家の「抑圧装置」として機能した仲人に対する批判的な姿勢が前面に出ている。一方、終章で展開した議論では、仲人をあえて肯定的にとらえ返す視点を提示している。後者の視点は、仲人の歴史研究がどのような現代的示唆を持つのかを考える中で導きだされたものである。

筆者は、本書のもとになる修士論文の執筆後、仲人の研究だけではなく、事実婚や夫婦別姓の研究、さらに「家族主義」や「家族の民主化」といったテーマの研究に同時並行的に取り組んできた。思い返せば、初期の問題意識はいわゆる家制度や「近代家族」への批判的パラダイムを背景にしていた。しかし、さまざまな研究を進めるなかで、こうしたパラダイムと問題意識を共有しながらも、その一方で進行する現代の「個人化」問題にどう取り組むべきかという関心が高まっていった。現代社会における家族関係の「個人化」をめぐる議論では、一方に個人の自由・平等を実現すべきとする推進の方向があり、他方に孤立化・不平等化を押しとどめるべきとする抑制の方向がある。自己責任や自助努力に帰着しかねない個人化のジレンマをどう乗り越えるのか。仲人研究を通じて、個人化する社会における共同性を考える手がかりを示したいと考えるようになった。その際、仲人を家制度や封建制度と結びつける見方からいったん脱することが重要だと気づいた。終章は、少々飛躍があることを自覚したうえで、読者が現代と将来の家族問題を考える手がかりを提示したいという思いから書かれている。

最後に、小関先生から今後の道筋を示していただいた点に感謝したい。ご指摘くださったように、課題に対する「手がかりは、既に本書のなかに記されている」。本書冒頭で仲人が有する多面性を自ら示しておきながら、その点あまり整理・回収されることなく全体が描かれてしまったことは本書の反省点である。特に、「仲人機能」の再構築を提唱した終章で簡単に触れるにとどまった、「仲介・承認・後見」という概念を今後どれだけ掘り下げていけるかが鍵になると個人的には考えている。そのためには、小関先生からご指摘いただいたように、「下仲人」と「上仲人」の二つを分析概念として精緻化したうえで、「パラレルにその変容を確認していく」ことが有効な方法になるだろう。

(さかい ゆういちろう 大妻女子大学)